調査の進め方

なにを探すの？

科名	種名	調査対象種
ツバメ科	ツバメ	❶
	コシアカツバメ	❷
	イワツバメ	❸
	リュウキュウツバメ	❹
	ショウドウツバメ	—
アマツバメ科	ヒメアマツバメ	❺
	アマツバメ	—
	ハリオアマツバメ	—

春になると姿をあらわす身近な鳥、ツバメの「巣」を探します。「ツバメ」とひとくちにいっても、日本にはツバメ科の5種と、アマツバメ科の3種の計8種がいます。今回は、これらのなかで、私たちがふだん見ることができ、建物などに巣を作る5種（ツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ、リュウキュウツバメ、ヒメアマツバメ）の巣を探してください。

どこを探すの？

まず町へ出たら、ツバメが飛び回っているかどうかに気をつけてみましょう。もしその姿が見つかったら、できる限りその動きに目を配り、追跡していきます。すると、建物や橋の中にスッと姿を消すのに気がつくでしょう。きっとそこに巣があります。巣のありそうな場所の見当がついたら、早速そこに行って、どこに巣が作られているかを探してみましょう。役所や駅、あるいは橋げたのような場所なら自由に出入りができますが、人家や牛舎などの場合にはかならずその家の方に、「ツバメの巣を探している」と断って、了解をもらってから調査しましょう。商店の場合も、お店の人に話した方がよいですね。

持ち物

特別な道具はいりません。まずは手ぶらで出かけてみましょう。

巣のある場所が分かったら、今度は記録用紙と筆記用具とカメラを持って行きましょう。カメラは、一眼レフのようなものなら申し分ありませんが、コンパクトカメラやレンズ付きフイルム（使い捨てカメラ）でも十分記録できます。

なお、ツバメの巣が暗い場所にあるときは、ストロボ（発光器）付きのカメラを使うと写真がはっきりと撮影できます。

記録のしかた

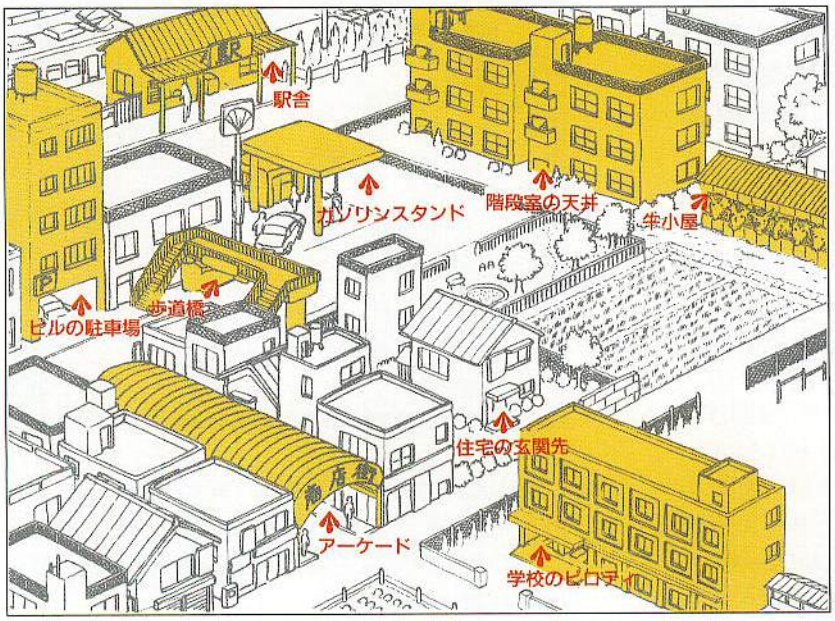
まず、調査票を見ながら、建造物について、その種類や環境を記録します。次に、全体の写真をとります。建物が個人のお宅や商店などの場合は、かならずその家の方などに許可をもらうようにしましょう。もし不在だったら、もう一度出かけて許可をとるようにしましょう。

次に、くわしく観察する巣を1つか2つ選びます。巣の作られている位置などについて、調査票に記入できたら、巣の写真をとります。

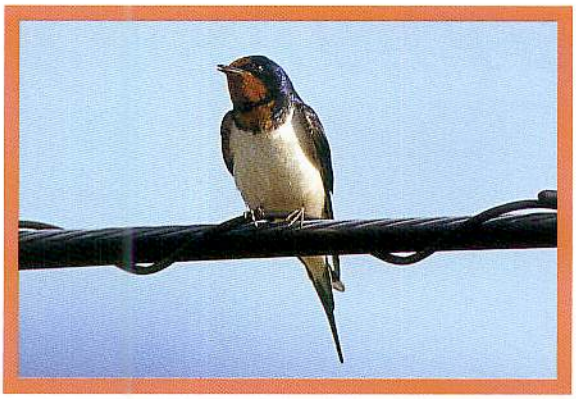
（写真のとり方は、P12〜13を読んでください。）

何回か出かけよう

くわしい記録をとることにした巣は、できるだけ何回かでかけて、親鳥のようすやヒナの育ち具合などを観察して調査票に書き込むようにしましょう。

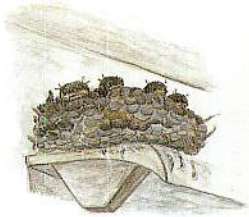


■巣の見られる場所



ツバメ

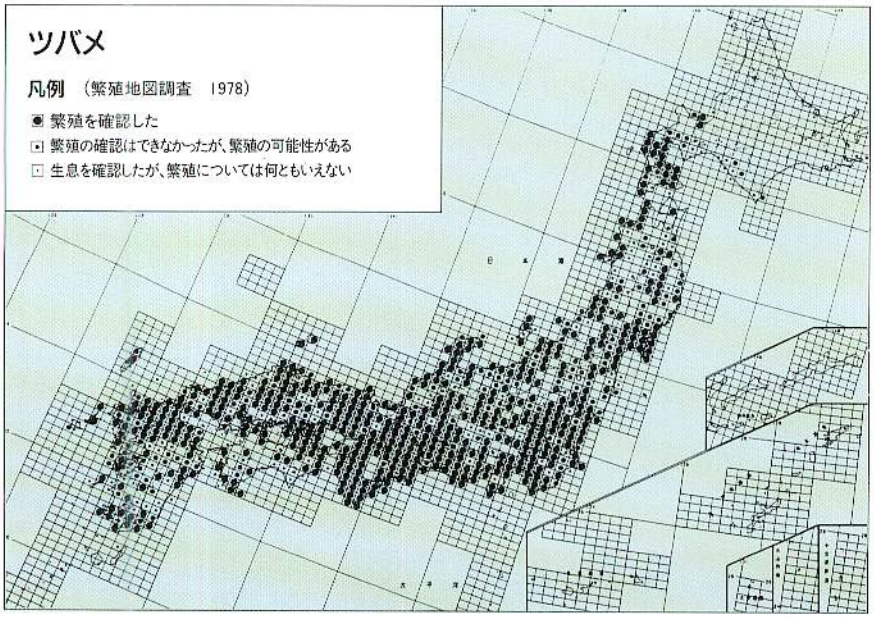
Hirundo rustica



[ツバメ科]

北海道～九州

体長17cm。もっとも身近に見られるツバメ科の鳥で、背中は黒く、長い尾を広げると白い斑点が見えます。喉は赤く、その下に黒い帯があります。夏鳥で、3月下旬から4月上旬頃に日本に渡ってきます。空中を巧みに飛び回って虫をとらえて餌にします。もともとは岩壁や洞窟に巣を作っていたと考えられますが、現在では人家のような建造物でしか巣が見つかりません。巣は垂直な壁に作る「カップ型」のものと、建物の梁(はり)や電灯などの上に乗せて作る「皿型」のものがあり、どちらの場合も上が大きく開いているので、ヒナの姿をよく見ることができます。巣の材料には、他のツバメ類と同じように泥と枯れ草を使います。

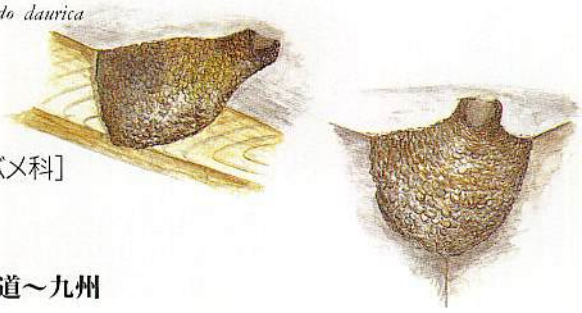


■1978年の分布図

1978年の全国調査の結果を見ると、ツバメは南西諸島をのぞく全国に広く分布しており、佐渡、対馬などの島々でも繁殖しています。しかし、北海道では南部だけに分布が限られています。今回の調査では、とくに都市周辺でどのくらい減っているか、一方、東北地方や北海道でどのくらい分布が広がっているかが、興味の持たれる点です。

コシアカツバメ

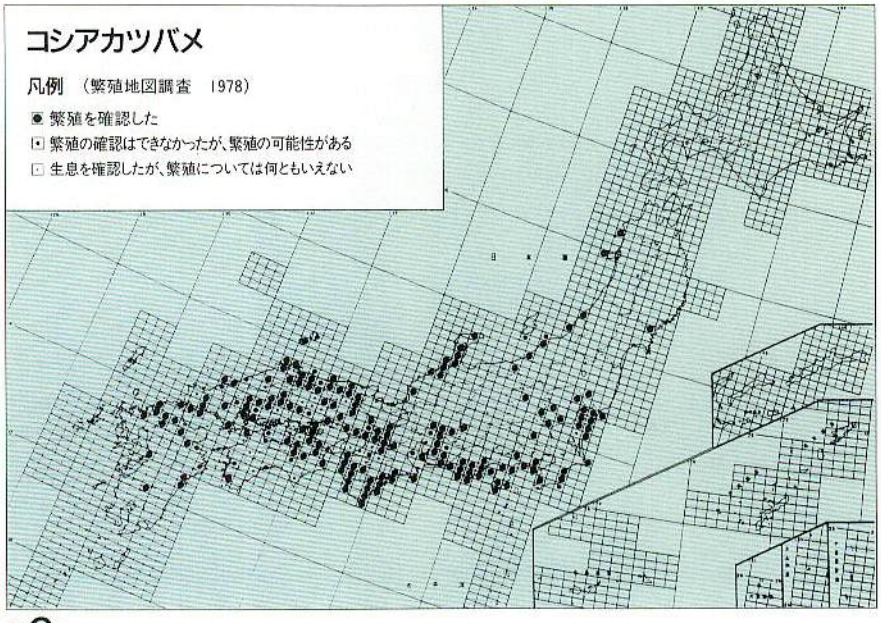
Hirundo daurica



[ツバメ科]

北海道～九州

体長18.5cm。長い尾をした姿はツバメによく似ていますが、腰は淡い赤茶色で、胸にははっきりした黒い縦すじがあります。夏鳥で、ツバメよりもやや遅く4月下旬頃に日本に渡ってきます。ツバメよりも空の高いところをゆったり飛び回って、餌になる虫を探しています。大きな建物の吹き抜けになった部分や、高層住宅の階段室などの天井に、「トックリ型」の巣を作ります。巣の入り口はトンネルのように伸びているので、中のヒナの顔を見ることはできません。コシアカツバメの巣はしばしば他の鳥に利用されますが、入り口に羽毛がはりつけられていたらヒメアマツバメ、枯れ草がたれ下がっていたらスズメが利用していることがわかります。

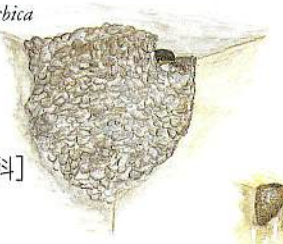


■1978年の分布図

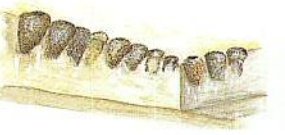
西日本に分布の中心があり、中部地方より北では、おもに海岸沿いで繁殖しています。関東平野では内陸部にも分布していますが、こうした広がりが他の地方でも見られるのかどうか、興味が持たれます。なお、1978年の調査では北海道での繁殖は確認されていませんが、礼文島と根室で巣が見つかったことがありますから、北海道でも注意して探してみてください。

イワツバメ

Delichon urbica

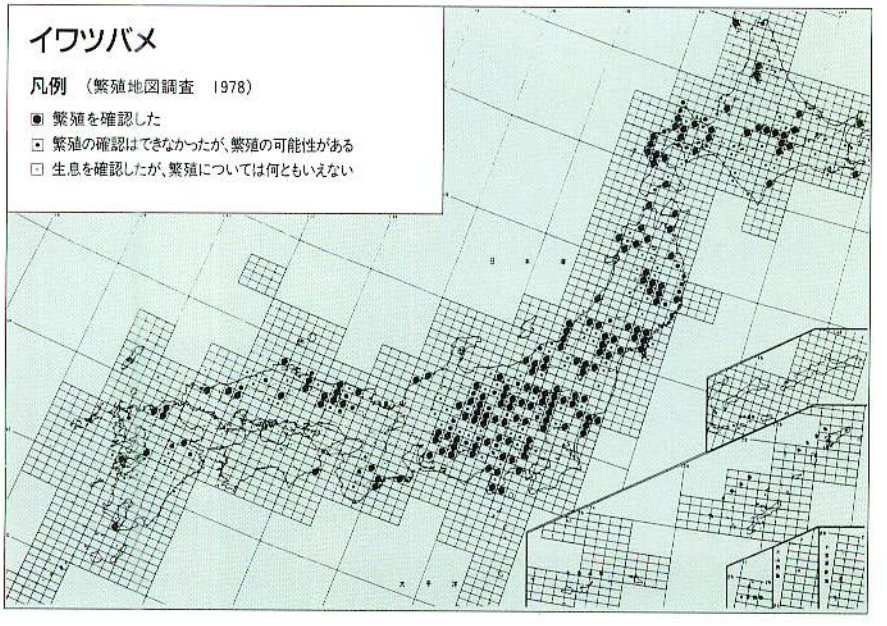


［ツバメ科］



北海道～九州

体長14cm。背中が黒くて腰の白いツバメ科の鳥で、下面は全体に白く見えます。ツバメよりも尾が短く、ジュリジュリと鳴きながら、高い空を群れで飛び回るのが見られます。夏鳥で、ツバメよりもやや早く3月下旬には姿を見せます。高山や海岸の岩壁に巣を作っていることもありますが、現在では学校の校舎のような大きな建物や橋げたに巣を作ることの方がずっと多くなっています。巣の形は「カップ型」ですが、天井に接して作るので入り口は小さく、ヒナは顔だけしか見ることができません。他のツバメ類よりも集団で巣を作る性質が強く、1つの建物で数百の巣が見られることも少なくありません。

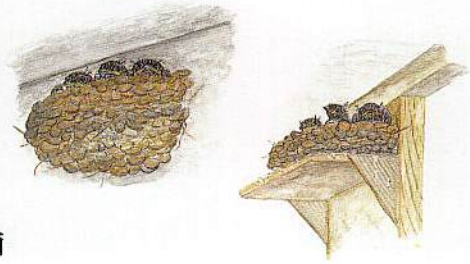


■1978年の分布図

イワツバメは、北海道から九州まで広く分布していますが、中部地方より北に分布の中心があり、西日本では限られた地域でしか見られません。近年、とくに都市部で分布が拡大している地方があるので、今回の調査でその拡大のようすが確認できることが期待されます。1978年の調査では分布が空白だった瀬戸内地方でも巣を見つけたいものです。

リュウキュウツバメ

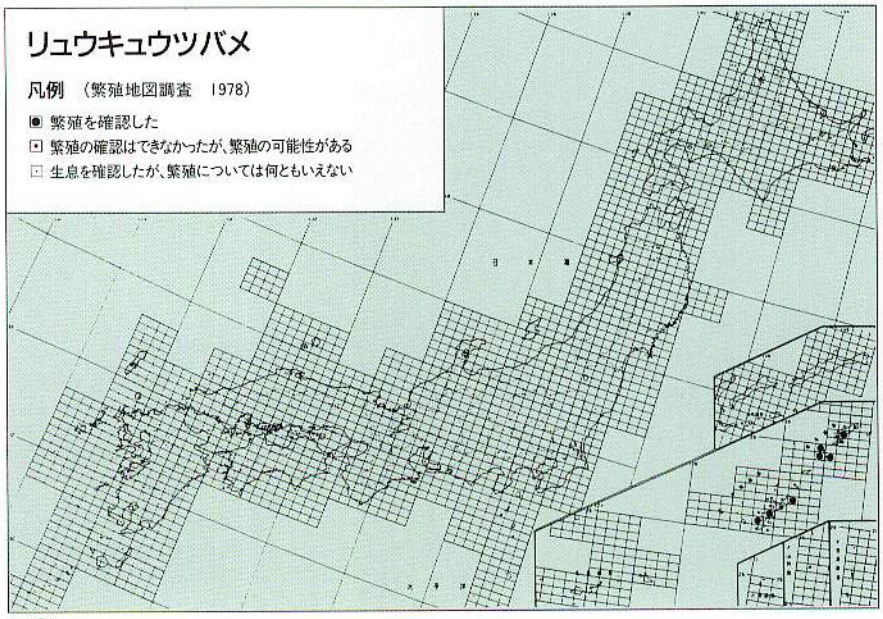
Hirundo tahitica



［ツバメ科］

奄美諸島以南

体長13cm。南西諸島だけで見られる小型のツバメ科の鳥です。顔の色や模様はツバメにそっくりですが、胸から腹は汚れた色をしており、全体に黒っぽく見えます。尾は短めで、電線にとまっているところを下から見ると下側が白と黒のまだら模様に見えます。おもに人家や橋げたなどに巣を作りますが、ツバメと違って自然の崖や洞窟などにも巣を作ることがあります。巣の形はツバメとよく似ていて、やや小型です。他のツバメ類と違って留鳥なので、川や水田の上を飛び回る姿を一年中見ることができます。なお、沖縄県の来間（くりま）島ではツバメの巣が見つかっているので、種類の見分けには（P5 参照）十分注意してください。

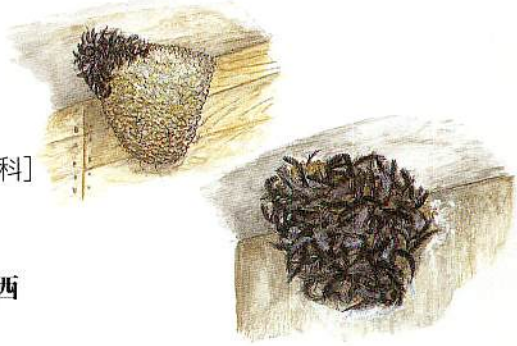


■1978年の分布図

奄美大島より南の南西諸島の島々に分布しています。1978年の調査では石垣島などの八重山諸島では巣が見つかっていませんが、それ以前に少数の記録があるので、注意して探してみてください。南西諸島には小さな島々が多くありますが、どの島で繁殖しているかを、一つひとつの島について明らかにすることが重要です。こまめに記録してください。

ヒメアマツバメ

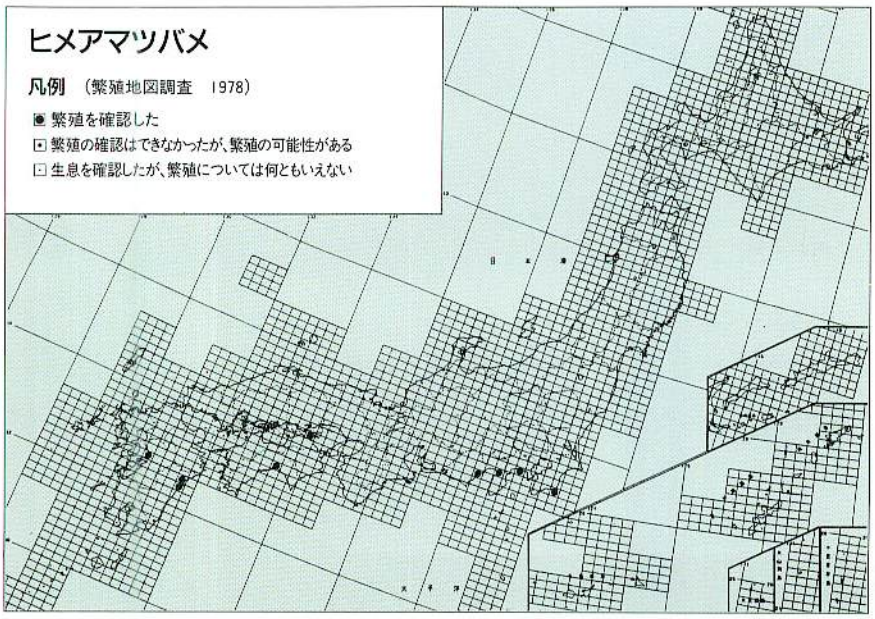
Apus affinis



［アマツバメ科］

関東地方以西

体長13cm。ツバメ科の鳥と姿は似ていますが、縁の遠いアマツバメ科に属しています。体長はイワツバメと同じくらいですが、翼が長いのでずっと大きく見えます。全体が黒っぽく、白い腰だけが目立ちます。巣は、多くの場合はコシアカツバメの古巣を利用しますが、イワツバメの巣を使うこともあります。どちらの場合も、巣の入り口に羽毛をはりつけているので、それと分かります。なお、コシアカツバメやイワツバメの巣の入り口から枯れ草がたれ下がっているのは、スズメが利用している場合です。ヒメアマツバメは他の種類の鳥の巣を使わない場合には、空中を飛びながら集めた羽毛と枯れ草を、唾ではりあわせて巣を作ります。



■1978年の分布図

日本では1967年に静岡県で初めて繁殖しているのが記録され、1978年の調査では千葉県から宮崎県までの太平洋岸で点々と巣が見つかりました。その後、茨城県、沖縄県などでも繁殖していることが報告されており、関東地方以西には相当広く分布していると思われます。今回の調査で、分布の拡大のようすを裏付けたいものです。